

連携, 共創そして共生: あらたな地域社会づくり

去る5月24日に、かつて、茨城大学教授を勤められた小峯秀雄先生のお誘いで、早稲田大学社会環境工学科地盤工学研究室の学生さんを中心とした皆さんに、“やがて80歳になる僕の考えていること”というお話をさせていただきました。そのお話をさせていただく数日前に、小峯秀雄先生から、「自然に帰ることのできるインフラ」に関心のある3年生がいるが、なにか助言をしてほしい」という依頼を受けていました。そのときは、「自然と共生できるインフラ」という表現のほうがいいのでは? Eco-DRR を調べてみては?」と気楽にメッセージをお返したのですが、後で考えてみて、そもそも“共生”って何だったのか? 具体的でわかりやすい“Eco-DRR”の事例が身の回りあるのか? と考え込んでしまいました。

色々調べているうちに、共生という言葉は、本来、生物学でつかわれていた言葉で、“二種の違った生物と一緒にすむこと”(新明解国語辞典(三省堂)第4版,1996)とありました。それがインフラと自然との共生というように他分野に援用されてきたものと想像されます。このことに関しては、ある著名な生態学者が間違った使い方だと批判していると聞いたことがあります。一方で、「広辞苑」(岩波書店,第4版,1991)には、共生には“共利共生”と“片利共生”があるとあります。このうち、“共利共生”という言葉はネット上にはなく、代わりに“双利共生”がありました。“共利共生”も“双利共生”も同じ意味だと思いますが、さらに考えているうちに、LRRIの社是にしています“先義後利”や“利他”の精神に通じるものがあることに気が付きました。生物学の書籍を探しているうちに、鈴木正彦・末光隆志共著:『「利他」の生物学(中公新書,2023)』という本に出会いました。読んでいるうちに、植物の世界には“利他”と“共生”があるとのことでした。新しい気づきです。ここを参考にして作成してみたものが図1です。

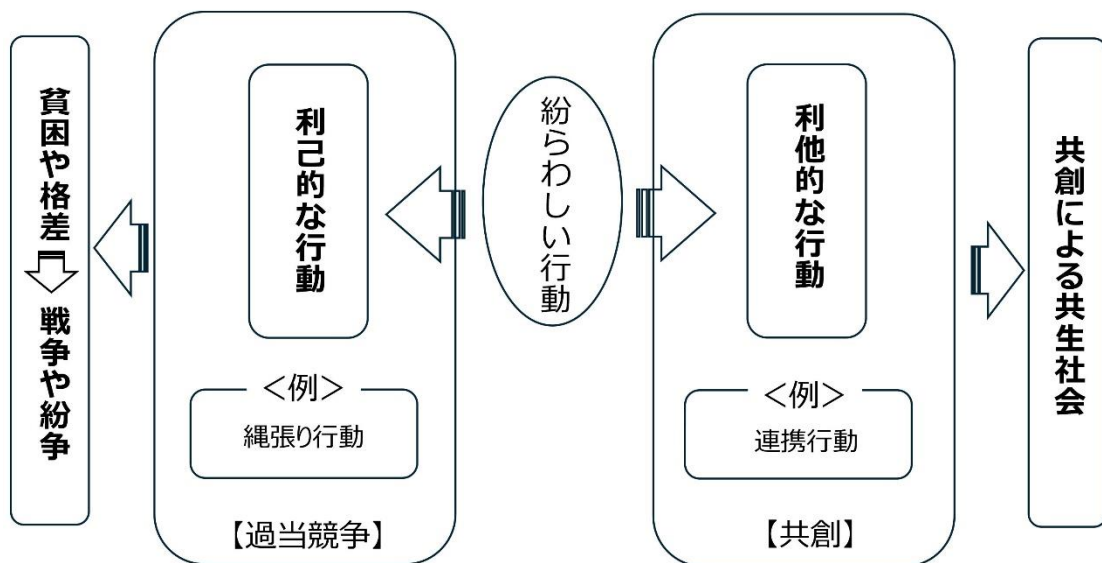


図1 連携, 共創と共生

(鈴木正彦・末光隆志共著:『「利他」の生物学(中公新書,2023)』を参考に作成)

この図によると、人間の利己的な行動が貧困や格差を生み出し、それが紛争や戦争を引き起こす、という結論になります。逆に、利他的な行動によって戦争や紛争を避けることが出来る、ということになりますが、少々短絡的で稚拙な感じもします。

早稲田大学でさせていただいたお話は昔話を中心でしたので、話の途中で学生運動が激しかった頃（1970年前後）のことを思い出しました。今の若い方には縁遠い遠い昔のお話ですが、東大安田講堂に“連帯を求めて孤立を恐れず、力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽くさずして挫けることを拒否する。”という落書きがあったとの報道を思い出しました。この落書きは本質をついていて今でも通じる力強いメッセージだと思っています。“一点突破，全面展開”などという過激派のスローガンもありました。

ところで、筆者は、現在、2020年4月に設立された「茨城大学 地球・地域環境共創機構（Global and Local Environment Co-creation Institute: GLEC）」（それ以前は、地球変動適応科学研究機関（ICASと呼ばれていました）に所属しています。任期は、令和7年3月31日までです。この組織は、“共創”を念頭に、“持続的な環境の共創に関する教育研究や社会連携の機能強化を図る環境分野の教育研究拠点を構築”することを謳っています。ただ、“共創によって共生社会を実現しよう”ということまでには言及していませんが、筆者自身は、“連携 or 連帯，共創そして共生“へとつなげていくことがこれからの日本の社会に求められていることの一つではないかと考えています。そしてこのことは、2030年に達成を目指しているSDGsにも通じるものとも考えています。

5年目を迎えたLRRRIは、このような目標を掲げて会員の皆様の知識と知恵を結集して、レジリエンスの高い地域社会づくりのための新しい考え方や技術開発を実現して、皆さまと共有してまいりたいと存じます。引き続き力強いご協力と御尽力をお願いする次第です。



写真1 紫陽花（あじさい）

雨にこそ とりどりの色 煌めいて

想いはめぐる あじさいのとき

（令和6年7月1日 代表理事 安原一哉）